

〈1〉「大谷石文化」の

日本遺産認定

文化課 課長補佐 渡部 淳一

1 はじめに

平成 30 年 5 月、平成 30 年度の日本遺産に宇都宮市（以下「本市」という）が申請した「地下迷宮の秘密を探る旅～大谷石文化が息づくまち宇都宮～」が認定された。全国から 76 件の申請があった中で認定はわずか 13 件であった。本市のまちづくりや市民の暮らしに溶け込み、大谷石と共に生き続けている独自の文化が、全国を見渡しても他に例を見ない貴重な文化であると高い評価を頂いたものであり、「大谷石文化」を築き、育んできた先人たちと、現在その継承や普及に取り組んでいる方々に敬意を表するとともに、日本遺産認定を大変誇らしいことと感じている。

これまで市民にとっての大谷石は、身近に当たり前のように存在していることもあり、ややもすれば特別感が薄いとを感じる面もあったかもしれないが、「大谷石文化」が日本遺産に位置付けられたことを契機に、市民がその価値や魅力を再確認するとともに、国内外の認知度を高めていくことで、地域の活性化につながる大きな好機になるものと期待している。

2 日本遺産とは

これまで、文化財の価値は、文化財個々の希少性や芸術性の高さ等で価値判断し、国・県・市が文化財に指定するなど「点」で保護してきたが、平成 27 年度に国が創設した「日本遺産 (Japan Heritage)」制度は、地域に点在する有形・無形の様々な歴史文化資源を 1 つのテーマ（ストーリー）で結び付けて「面」として特質を

浮き立たせ、それを「日本遺産」として認定し、ストーリーを構成する歴史文化資源を総合的に活用する取組を進めるものである。国は東京オリンピック・パラリンピックが開催される 2020 年までに、全国 100 か所程度を認定し、日本の魅力を国内外に一体的に発信していく文化財版クールジャパン戦略といえる施策である。

これにより、「日本遺産に認定された地域の認知度の向上」、「日本遺産を通じた様々な取組による地域住民のアイデンティティの再確認」、「地域のブランド化や地方創生の実現」といった効果が期待されている。

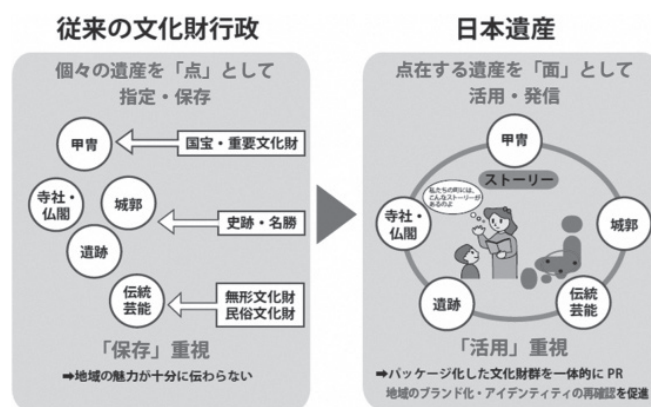


図1 従来の文化財行政と日本遺産の比較

文化庁ウェブサイト から引用

3 凹が拡がり、凸が生み出される宇都宮

日本遺産に認定された“ストーリー”のテーマは、石と永年の関わりの中で築いてきた本市ならではの「大谷石文化」である。

縄文時代に風雨をしのいだ洞穴利用に始まり、江戸時代からの採石の歴史。人車軌道や軽便鉄道による販路の拡大や採石需要の高まりとともに広がる地下空間。掘り出された石が変幻

¹ 文化庁日本遺産ポータルサイト「日本遺産とは」

<https://japan-heritage.bunka.go.jp/ja/about/index.html>,

平成31年3月5日取得

自在に形を変えて市民の暮らしに溶け込む大谷石の活用。自然と人工が織りなす大谷奇岩群の特異な景観や、本市独特の街の景観を創り出している大谷石建造物の広がり。そして、大谷石の産地である大谷地域では、今も採石が営まれ、観光資源として人が集まり、その傍らでは採掘場跡の冷熱エネルギー利用などの新たな産業が産み出されていくダイナミックな変化が続いている。

石を掘り続けて人の手で生まれた、巨大で神秘的な空気に包まれた圧倒的な地下空間。そして、掘り出された石は宇都宮の市街地や農村部に運ばれ、石蔵や塀、民芸品などに形を変え、市民の暮らしに溶け込むとともに、カトリック松が峰教会をはじめ特徴的な建造物に姿を変えた。

特に、20世紀を代表する建築家の1人であるフランク・ロイド・ライトによって設計された旧帝国ホテル(大正12年築)は、鉄筋コンクリートと組み合わさって大谷石が素材として使用され、完成披露パーティ当日に見舞われた関東大震災に耐えたことから一躍注目を浴び、以降の日本の近代建築に大きな影響を与えた。

その石を掘り出した採掘場は「ホテル山」と呼ばれ、今も親しまれている。

また、岩山をくり抜くようにお堂が建立され

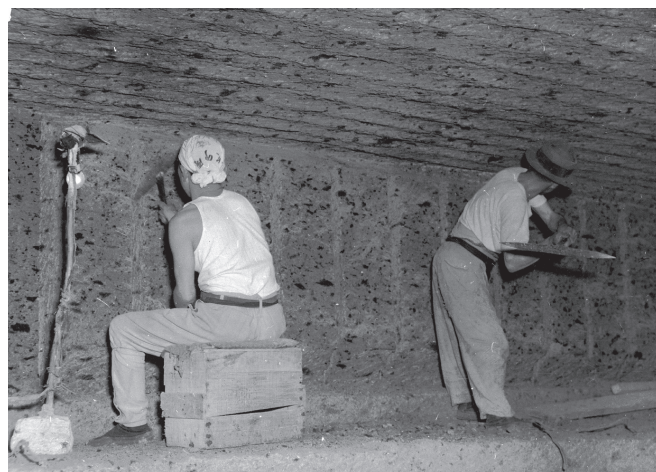


写真1 大谷石採掘の様子 (1950～60年代)

大谷石材協同組合提供



写真2 カネイリヤマ採石場跡 (大谷資料館)

大谷資料館提供

表1 大谷石文化のストーリーを構成する文化財

多気山(多気城跡)	二荒山神社の石垣
大谷の奇岩群(御止山)	カトリック松が峰教会
大谷の奇岩群(越路岩)	宇都宮聖ヨハネ教会 聖堂
奇岩「天狗の投げ石」	宇都宮大学庭園
大谷寺洞穴遺跡	栃木県中央公園の 旧商工会議所遺構
長岡百穴古墳	星が丘の坂道
大谷磨崖仏	旧篠原家住宅
ホテル山 (トウヤ採石場)	上野本家住宅
カネホン採石場 (高橋佑知商店)	小野口家住宅
カネイリヤマ採石場 (大谷資料館)	芦沼集落
大谷石掘削道具一式	上田集落
軌道跡	西根集落
東武鉄道南宇都宮駅舎	立岩神社
渡辺家住宅	岩原神社
屏風岩石材	宇都宮貞綱・公綱の 供養塔
大久保石材店	無事カエル
旧大谷公会堂	青源味噌店
山の神まつり	ダイニング蔵おしゃらく
大山阿夫利神社	南宇都宮石蔵倉庫群

日本遺産認定申請書から作成

た大谷寺には、日本最古の磨崖仏といわれ国の重要文化財に指定されている千手観音像が刻まれており、古くから信仰の場となっていた。

このように、「大谷石文化」の本質は「掘って、彫って、凹が拵がり、凸としての宇都宮のまちが創り出される。これからも宇都宮の人々は、大谷石と共に暮らしていく」営みの蓄積であり、その歴史と変化し続けることで魅力を増していく期待をストーリーに織り込んだ。

4 「大谷石文化」のストーリー化

日本遺産を申請するための条件として「歴史文化基本構想」の策定があった。地域にどのような歴史文化資源があり、それらを地域のためにどのように守り活かしていくのか、その考え方や方針を明らかにするものである。

本市では、平成28年4月から構想の策定作業を開始し、市内に約3,800件にのぼる歴史文化資源を把握・整理し、本市の歴史文化の特色を市民に分かりやすく伝えるため、「近世の宇都宮城下の賑わい」や「中世宇都宮氏の栄枯盛衰」、「交流都市として栄えた本市の発展」など8つの物語（エイト・ストーリー）としてまとめた。

このうち「大谷石と共に生きた石の文化」を日本遺産申請のテーマとして選び、平成29年4月からは歴史文化基本構想の策定作業と並行して、庁内に検討チームを立ち上げ、大谷石の調査研究を行っている外部の方々の意見などもお聞きしながら、「大谷石文化」の特色や魅力を日本遺産のストーリーとしてまとめ上げていった。

難しかったのは、大谷石文化のストーリーを構成する素材は豊富にあったため、それをどういう切り口でセレクトし、どのように組み立てていくのか頭を悩ませた。また、「大谷石文化」の歴史を伝えるだけでなく、地域の活性化まで

を視野に入れ、ストーリーを読んだ人が現地に行ってみたくするような、目に浮かぶストーリーを、申請の規定文字数（概要は200字、本文は2,000字）の中で表現することに苦労した。

5 日本遺産を通じた地域の活性化

日本遺産の申請には、地域の歴史文化の特色や魅力を分かりやすく伝えるストーリーとともに、日本遺産認定後に取り組む地域の活性化策と成果目標の設定が求められており、ストーリーと地域活性化策のセットで審査が行われる。

本市では、「大谷石文化」を国内外に効果的に発信し、認知度や来訪意欲を高めるため、観光客の嗜好性等のマーケティング調査及び魅力発信戦略の策定のほか、プロモーション動画の制作や採掘場地下空間等のCGでの再現、文化財の案内板や誘導標識の設置などの環境整備、さらには来訪者に大谷石文化の魅力をわかりやすく伝えるガイドの育成など、「調査研究」、「情報発信・普及啓発」、「環境整備」、「人材育成」の各分野において様々な取組を計画した。

また、成果目標については、国のガイドラインで考え方が示されており、国内外からの観光客の誘客に関する視点をはじめ、地域文化に対する誇りの醸成など、地域や住民の視点からも目標を設定することが求められている。

こうした点をふまえ、目標年次の2023年までに大谷地域の観光客数を平成28年の60万人から120万人に増やすことや本市の歴史文化に誇りを持ち、その保存や活用に満足している市民の割合を50%以上にするなどを目標とした。

6 官民連携による「宇都宮市大谷石文化推進協議会」の設立

日本遺産認定を受けた自治体には、国から3

年間補助金が交付され、それを活用して前述の地域活性化策に盛り込んだ事業の具現化に取り組むことが可能となるが、官民連携により事業を推進するため、平成30年6月27日に、歴史文化団体や観光・まちづくり団体、地域団体や公共交通事業者で構成する「宇都宮市大谷石文化推進協議会」を設立した（表2）。

今後は、目標年次である2023年に向けて、自主財源の確保や民間活力の活用など組織の自律化を図りながら、「大谷石文化」の効果的な魅力の発信に取り組んでいく。

表2 宇都宮市大谷石文化推進協議会構成団体

歴史文化 関係団体	宇都宮市文化財保護審議委員会
	宇都宮市文化財ボランティア協議会
	宇都宮伝統文化連絡協議会
	(公財) うつのみや文化創造財団
観光・ まちづくり 団体	宇都宮商工会議所
	NPO法人宇都宮まちづくり 推進機構
	宇都宮観光コンベンション協会
	(一社) うつのみやシティガイド協会
地域団体	城山地区コミュニティ協議会
	大谷石材協同組合
公共交通 事業者	東日本旅客鉄道株式会社
	東武鉄道株式会社鉄道本部営業部 北関東営業支社
市	宇都宮市
	宇都宮市教育委員会

7 「日本遺産のまち」として

「大谷石文化」の故郷であり、奇岩群など独特な景観や、採掘場跡地に広がる幻想的な地下空間など、多くの資源を有する本市を代表する観光地の大谷地域は、近年、観光客が増加しており、飲食店も相次いでオープンし、週末はも

とより平日も賑わいを見せてきている。

また、採掘場跡に溜まった地下水を利用した地底湖クルーズや、その冷たい水を冷熱エネルギーとして栽培に活かして夏でも美味しいイチゴが食べられる圃場が整備されるなど、新たな産業創生に取り組みながら、大谷石を体験して楽しむことができる環境整備が地域や民間と連携しながら進められている。

今後、平成31年のJR東日本、東武鉄道、栃木県と市町が連携した観光キャンペーンである「本物の出会い 栃木」アフターデスティネーションキャンペーンをはじめ、多くの外国人が日本を訪れる2020年の東京オリンピック・パラリンピック大会、さらには2022年のとちぎ国体など、本市の魅力を多くの方に体感していただく絶好の機会が控えている。こうした好機の中、本市が「日本遺産」という新たなブランドを身にまとったことは、都市の魅力を高め、選ばれるまちづくりを進めていく上で大きな起爆剤になるものと期待される。

掘って、彫って、まちを築いてきた文化は絶えることなく続き、このまちを訪れるたびに何か新しい体験ができる。そんなワクワクするようなサイクルを官民連携により確立することで、継続的に宇都宮を訪れてくれるファンを増やしていきたいと考えている。



写真3 日本遺産認定を契機に「南宇都宮石蔵倉庫群」で開催された地域の納涼祭

本市撮影